

保育家具に携わつて

渡辺晃男

保育家具との出会い

木工家を志して約40年近くたちますが、保育家具に携わってきたのはここ10数年です。それ以前は無垢の木を使った注文家具や、伝統工芸展への出品に目を向けていて、保育家具のことは視野にありませんでした。長男が保育園（東京都多摩市のバオバブ保育園）にお世話になり始めてから、少しずつ保育家具のことが気になり始めました。そんな時にバオバブ保育園からもう一園造るので保育家具を作つてもらえないかと相談を受けて、改めて保育家具を見つめると、現在使われている保育家具は本当に子ども中心に考えられた家具なのだろうかと疑問をもつことが多かったのです（半分は大人のため？）。

「子どもたちにとってよい保育環境、保育家具とは何か？」

まずは子どもたちを中心と考えることであると思い、子どもたちの心に残る原風景と

してどのよきな姿がよいか想像し、おぼろげながらに思つたことは、言葉には言い表せない安心感や、多少傷が付いたり汚れてもあまり気にならない包容力だとthoughtでした。

そのためには、

- 1 無垢の木材で作ること。
- 2 自然塗料を使うこと。
- 3 デザインに統一性をもたせること。

が重要だと考えました。

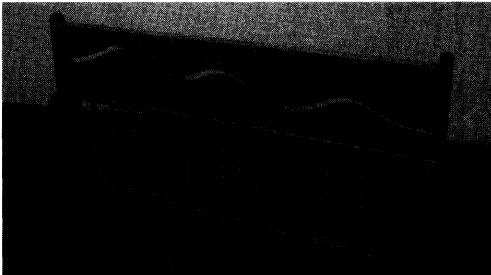
子どもたちの家具とはいって、自分としては今まで作ってきた家具の延長線上に保育家具を考え、無垢の木材を使いシンプルなデザインにしようと思つていました。それに加え、幼い子どもたちが使うので安全を十分に考える、つまり機能としての安全と、材料としての安全が満たされていなくてはなりません。

材料としての安全は主要材料、接着剤、塗料の選定が問題となります。主要材料としては合板や集成材は子どもたちの原風景としては似つかわしくないと思い、無垢材にこだわり、昔からヨーロッパで高級家具材の一つとして使われてきたナラ材を選びました。接着剤は水溶性のものを使用することにし、背板に合板を使用する場合は接着剤にフルマリンを使用していない合板を選びました。塗料の選定には化学塗料を使わずに自然塗料を使用したいという気持ちがありました。化学塗料のラッカーやウレタンは塗膜が強くメンテナンスの必要はありませんが、それに比べて自然塗料は弱くメンテナンスをしながら使っていかなくてはなりません。しかしVOC（揮発性有機化合物）の含まれ

る可能性は少なく、メンテナンスをしながら使っていくといい味わいになります。安全性から考えれば自然塗料を選ぶことに迷いはありませんでしたが、自然塗料の中でも当時日本に入ってきたばかりのドイツのアウロ社の塗料を選びました。素材の生産段階から、原料栽培に農薬や化学肥料を一切使用しないこと、100%天然原料であること、残れば肥料にもなる、これならば乳児や幼児がなめても安全だろうとの判断からです。

椅子とテーブルの関係については、子どもたちの成長に合わせて適正な関係にすることはなかなか難しい問題です。年度初めの四月と年度終わりの三月では子どもたちはだいぶ成長し、同じ年齢でも身長に差があるためです。常々、子どもたちのお絵かきの姿勢や食事の時の姿勢が不自然だなど、つまりひじの角度がつきすぎていて窮屈そうだと思つていきました。なるべくならば椅子に座つてテーブルに手を乗せた時にひじがV字にならずに90度に近いほうが作業しやすいのは、大人ばかりではなく子どもたちも同じはずです。そこでもう一度検証するために測定用の椅子とテーブルを作つて、バオバブ保育園の0歳から5歳までの子どもたちに座つてもらつてデータをとつてみたところ、テーブルの高さを低くすれば子どもたちの姿勢に無理がなくなることがわかりました。保育家具の形や大きさは、バオバブの職員の方々と相談して検討し直しました。ただ家具が部屋の中に在るのではなく、どのようにその家具が子どもたちとかかわり合うの





かが保育家具では重要な要素であり、現場の保育士の方々が日々感じていることから生まれるのが本当の保育家具だと思っています。「こここの場所にこういう用途のこういう形の家具が欲しい」と、まさに保育家具は注文家具の原点でした。

子どもたちが柵の内に

多くの保育の現場では、遊ぶ、食べる、寝るを一つの空間で行わなければならず、少ない保育士で多くの子どもたちの面倒を見なければならない現実があります。「食事が終わって後片付けをし、掃除をし、布団を敷く」保育士としてかなり忙しい時間帯には、子どもたちに一時的にどうしても限られた一部の空間の中に居てもらわなければならないことも起こり得ます。こうした現実を何度か目にし、またお昼寝コーナーの柵を目にするにつけて寂しい思いをしていました。

そんな時に、お昼寝コーナーの柵を子どもが乗り越えたので柵を高くしてほしいとの要望があり、玩具作家の曳田宏氏と相談し、柵の上に動物のキャラクターを取り付けました。隔離の場から遊びの場にしたかったのです。さらに発展させて柵の本身に玩具を入れ込み、家具作家の岩井健一氏にも協力してもらい、幾つかの保育園に玩具サークルを取り付けさせていただき、動くビー玉の玩具も開発しました。これらの時に私たちが

一番気に掛けたことは、その保育園で保育士の人たちがどのような遊びをさせたいと思つてゐるかということでした。私たちの提案した物ではなく、その保育園にあつたオリジナルの玩具サークルを保育の現場からの声で作りたかつたのです。

保育士と共に思いを形に

お茶の水女子大学附属いづみナーサリー（以下、ナーサリー）では室内環境の見直しの中で、「向こうが見える玩具としての仕切り」を考えておられ、私たちが作つてきた玩具サークルが目に留まり、連絡をいただきました（一〇〇八年）。お話を聞き伺うと、太陽、星、風、ひよこを入れ込み、自然が子どもたちの成長を見守るイメージの自立式玩具サークルにしたい、できれば園名の「いづみ」もどこかに入れたいとのことでした。何度も協議を重ね、上段には、くるくるの指で回せる太陽、卵から生まれて動くひよこ、触るとカタカタ動くビー玉が入ったお星様、回すと風とカラカラと音を感じる玩具。下の柵の部分にアタッチメント式に取り替えられる木画風の板、そこには太陽と虹、そして山からわき出るいづみを表しました（下の写真）。

次に相談を受けたのが、室内の大型遊具でした。平面的な空間に高い場所を設け、子どもたちに高い所から見下ろす視野を与え、階段や滑り台も利用したいとのことでした。一年以上に



わたつて、皆さんで協議を重ねてきていただけあって、伺つた時にははつきりとしたイメージ画が出来ていて、コンセプトもしつかりしていました。私は初め、大きい遊具なので建物と一体化したほうが危険が少ないとthoughtですが、何度も協議を重ね、一つひとつを独立した単体と考え、組み合わせることにより、いろいろな遊びができる形態にしました。また高い場は大勢の子どもや大人が一度に乗ることが予想され、それに耐え得る強度と共に遊具としての面白さや優しさを表現したいと思いました。

上下に動くのぞき穴、ビー玉とカットレンズ、上から下へと回転しながら落ちていく玩具、それらを入れ込んだアーチ上の柵、どれも初めての経験でしたが、ナーサリーの皆さんと共に考え実現していくのはとても楽しく貴重な経験でした。

「子どもたちにとってよい保育環境、保育家具とは何か？」

これはとても難しいテーマですが、現場の保育士の方々と共に一步ずつ前に進んでいければと思っています。

(木夢工房)

